

聞名仏教

第 157 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 10 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

読経の妙味

佐々木蓮磨

ある人が清沢満之先生に尋ねていうには、

「長らく外に出ていた人や、学問をした人などは寺に帰って法要に行ったり、読経することなどを嫌うものですが、先生は如何ですか」と。

すると先生が言われるには、「そうですね、私も以前は読経などつまらぬことだと思っておりましたが、ただ今では決してつまらぬものとは思いません。むしろ深い意味を感じるようになってまいりました。仏前に端座して読経することは、如来の前で仏徳を讃嘆することであって、百千の聴衆の前で演説や説教をするのと同じく、少しも変わらぬ。否、ずっとすぐれた役目であるように思います。演説や説教には、人間の計らいが多分にまつわるものであるが、読経に

は、そうした計らいがまじらず、ひたすらに如来の説法を聞き、仏徳を讃嘆させていただくことであるから、極めて純粋な仏行であると思えます。また、経文読誦の微妙な味わいに到つては、自分みずからが独りで味わえるもので、なんとも申しようがありません。それでは一里四方の小僻地において、毎日同じような法要を勤めながら、少しも退屈や不愉快を感じません。心中まことに満足して寺役に歩いております」と申されたそうです。

問題は人間の心がまえ一つにあるのではないのでしょうか。同じことをしておつても、その心がまえ一つで千差万別の価値が生ずることになるものです。

禅語に「随所に主となる」という名句がありますが、これはまことに意味深いこ

とばであると思えます。つまり、真の独立者となることとでありましょう。人間は自分の独力で生活することができるようになったことを独立といいますが、それは形の上の独立であって、精神的の独立とは言えませぬ。なぜかと言えば、いろんなことに駆使されて自主性を失っているからであります。

人間は何事によらず苦しんだり悩んだりすることは、自分自身には気づかないが、他の事物から使われている証拠であります。もし人間が、自分そのものの自主性を失わなかったならば如何なる境遇にあつても、また、いかなる事件に出会つても、それに支配されず、むしろ、それを自分の心構え一つによつて自由に処理して行くことができずから、決して苦しめられたり悩まされ

たりすることはないのであります。

近代は科学の進歩によつて、すべてが機械化され、人間が機械から使われるようになったことが、現代人の深刻な悩みであると言われていますが、この苦悩を救う道も、結局は人間の自主性を精神的に取り戻す以外にはないかと思えます。

(了)

《遠方法話予定》

――
* 十二月八日から九日午前
福井市。福井別院(大谷派)
報恩講(電 0776214100)
* 十二月九日夜から十日午
後。姫路市。西源寺(大谷
派) 報恩講(電 0792977624)



対話編 『浄土真宗』

③

を分け隔てて見る見方です。自分を自分以外を分け隔て、自分を愛し、他を対立項と見ているのです」

B 「他者を対立項として見るとは」

A 「具体的に言いますと、自分に都合のよい人は愛し、

近づけますが、自分に都合の悪い人は嫌ったり憎んだりする、そしてそれ以外の人には無関心、いわば冷たいです。そういう人間関係を生み出すような心が迷いの心です。そういう見方は智慧がなく、純粋な慈悲のない煩惱の心だと教えられています」

B 「人を愛しているという場合でも、自分の気に入つた人、都合のよい人、利益になる人を愛しているのであって、それは純粋な慈悲ではないのですね」

A 「ええそうです。そういう愛と憎しみの感情が浄化されるのを仏教では〈捨〉といいますが、愛・憎や好き・嫌いの感情が〈捨〉て

られている平等な愛が仏の慈悲です。こういう智慧であり慈悲の無量なるはたら

きをアミダ仏といい、仏教学者の金子大榮師はアミダ仏の智慧と慈悲を一言で〈大悲の智慧〉といわれました」

B 「その大悲の智慧がなぜ光明と表現されるのですか」

A 「それは大悲の智慧にであって、自分と他者とを分け、自我中心的に閉塞されている心が、世界に対して心が開かれ、明るくなり、物事の真実が見えて、充実してきますから、そのような大悲の智慧はまさに光明というほかありません」

B 「アミダ仏の本質は寿命無量と光明無量ということですが、寿命とは万物がそこに置いて生まれ、その中で動き、その中で終わっていく、そういう大いなるいのちのはたらきなのです」

A 「ええ、それは今日の言葉でいえば、エネルギーとでもいうべき能力、まさに無限の生命活動といえましょう」

慧です。自分と自分以外のものを自己と一体のごとくに感知する智慧です。他のものを自分と離れない、他と融けあっている感覚でものごとを見る眼です。他のあらゆるいのちを自分と一つのいのちと見る見方です」

B 「では量りない慈悲とは」

A 「さどりの智慧は自他を一つのいのちと知る智慧ですから、生きとし生けるものを自からの如くに共感する心といわれます。衆生の苦しみを自らのごとくに感じ、衆生の痛みをみずからを自らの安楽と感じるような心、それは大いなる慈悲でありアミダ仏の大悲の心といわれています」

B 「仏のさどりの智慧からの慈悲はそういうお徳があるのです。では迷っている私たちがどうなのですか」

は「でははかりなき光明とはどのようなはたらきですか」

A 「その内容は量りない智慧であり慈悲のはたらきであるといわれています。智慧とは悟りの智慧で、一言

でいえば自他一如と見る智

られて『仏説無量寿経』になつたのです」

A 「ええ、釈尊の説法は民衆の間に伝えられてきて、『仏説無量寿経』として世に現れたのです」

B 「それはいつごろ〈経典〉という形で世に現れてきたのですか」

A 「インドで一世紀前後といわれています。それまでは口伝で民衆に伝えられてきたといわれています。なお、インドの『仏説無量寿経』の原語では、光明無量はアミターバ、寿命無量はアミターユスと呼ばれています」

B 「積尊は悟りを開かれて、量りない光のはたらきであって、それを光明無量と説かれたのです。よう。寿命無量も同じです。積尊は量りなきいのちに触れられて、〈ああ量りなきいのちよ〉と感じられてお説

きになつたのでしょうか」

B 「積尊のその説法が伝え

B 「アミダ仏の本質は光明無量・寿命無量であることをお聞きしましたが、寿命無量は量りないのちのはたらきであり、万物がそれ

A 「光明無量とは量りない

光のはたらきで、これがまたアミダ仏の本質なのです。

〈ああ量りなき光明であることよ〉と、そのはたらきを最初に自覚し実感されたのがお釈迦様（釈尊）だといえましょう。積尊は悟りを開かれて、量りない光の

はたらきであって、それを光明無量と説かれたのです。よう。寿命無量も同じです。積尊は量りなきいのちに触れられて、〈ああ量りなきいのちよ〉と感じられてお説

すね」

A 「ええそうです。智慧とは、繰り返し返しますが、自他を一如と見る心であり、それは他のいのちに共感し、融けあい、己の如くに他を見る心であって、それは同時に慈悲の心でありましよう。『仏説無量寿経』には、

（もろもろの衆生において、視^{みよ}わすこと自己のごとし）

と説かれ、『法華経』（譬喩品）には

（今、この三界は、皆これ、わが有なり。その中の衆生は、悉くこれわが子なり）

と説かれています。アミダ仏の智慧の眼は一切衆生を自己の如くに見、一々の衆生を我が子の如くにみそなわしたもう、と説かれています。これはまさに大悲の智慧のお心です」

B 「アミダのいのちにはそういう大悲の智慧のお心が

はたらいているということがなかなか信じられません」

A 「信じられないというのはよく分かります。それは、いのちの不思議というほかはないですね。そういうことはたつきがあるということは私たち迷いの衆生には分かりませんが、仏陀釈尊はそういうのはたつきがあることを感得されて説かれたのが經典です。でも量りないのちには慈悲の心がある、そういう大慈大悲のはたつきがアミダのいのちにははたらいている、そういう徴^{しるし}がかすかですが、私たちの身近に感じられます」

B 「そのかすかな徴とは」

A 「私たちのいのちはアミダ仏のいのちの中にあり、アミダ仏のいのちからいただきたいのちですから、私たちのいのちはアミダ仏のいのちに根底的につながっています。そうするとアミダ仏の慈悲のはたつきが、小さな私たちのいのちのなかです露わになることがあります」

B 「それはどういう時ですか」

A 「それについて私は、偉大な仏教者であった鈴木大拙先生の遺書ともいうべき文章に書かれていることを知りましてご紹介致します。大拙師の『東洋の見方』（岩波文庫）という本の中で、

獅子が鹿を打つを見て「可哀相だ、なんとかならぬか」と考え込む。

野中の一本松が雨にぬれてしよんぼり立っているのを見て、これに傘でも差してやれぬかと憐れむ。二階に寝かしておいた子猫がどうしたかと気にかかるので、階段の下まで来て耳をすまして、様子を聞きとらんとする母親の真剣さ、これらがいずれも大悲の本願から出ている。この本願に率^{したが}うのが道である。（遺稿）

とありました。これを読んで、小さな私たちのいのちに純粋な慈悲の心がふっと一瞬でも起こって来るのはアミダ仏の慈悲の心が私のいのちの根源にはたらいて

いる、アミダ仏のいのちから起こって来る証拠であると知らされました」

B 「このような現象はよくありますね。先日TVで京都大学の類人猿の研究所の実験の動画をみました。チンパンジーを一匹ずつ入れた二つの檻があり、檻と檻の間は柵で見れるようになっていて、一方の檻の猿にはバナナを沢山与えます。もう一方の檻の猿には何も与えないという実験でした。そうするとバナナを沢山食べた猿がとなりの檻にいる飢えた猿に手もとにあるバナナを檻の間から投げてやる、という内容でした。猿にもかわいそうだという憐れみの心があり、やさしい行動をするということが分かるという実験でした。これに似た話はいくらもあると思います」

A 「ええ、私たちにもおもわず（ああかわいそうだ）という心が起こることは時々あります。これは私の人間性とか性格からというよりは、いのちそのものから現れたのだと思います。ど

んな悪業の重い人にもそれは現れてくる心でありましよう。私たちのいのちはアミダのいのちに結ばれていますから、アミダ仏の慈悲の心から起こったとしか言いようはありません。ただこういう純粋な憐れみの心が小さいのちの私に一瞬でも吹き上げてくるのです。が、せっかく湧いてきたのにすぐに私たちの自我心でかき消されますし、そういう慈悲の心の通りに行動することはほとんどできません。私たちは我執我愛の煩惱で一杯ですし、また私たちの実際の行いは極めて限定的な行動しかできません。こういう純粋な慈悲の心が起こり、その心にすつと従って行動できる人は菩薩といわれるような人たちです。そういうようなお方もあります。う。しかし私たちは、普通はなかなかそうはなりません」

B 「凡夫の心は自我が中心になっていて、我愛我執のために慈悲の行動は大変難

信心夜話

いお歌です。この歌
について木村無相さ
んが、

【住職雑感】

二六歳の時初めて

インドを十人ほどで旅をした。チェンナイ(旧マドラス)で、インドの裕福な人たちが歓迎のパーティーをしてくれた。

会場に行くと、食事はバナナの葉の上に載せられており、すべて菜食で、お酒もなかった。その席で私が仏教の坊主であると聴いて、一人のインドの夫人が寄ってきて「あなたは肉を食べますか」と尋ねられた。「食べます」というと、「仏陀の教えにそむくではありませんか」と批判された。それ以後「肉食」の問題がずっと頭にこびりついている。仏陀の教えである「不殺生戒」(非暴力)に基づいて、いのちを殺すことは慎みなさいという教を護ろうとするところから、菜食(精進料理)をすることがおのずと勧められきた歴史がある。私がインドの寺に居たときは菜食だったし、今でも高野山とか比叡山のお寺に泊まると菜食と聞いている。肉を食べることは、自ずから生き物に暴力を振るうことに連なるので、菜食が勧められてきたのである。しかし、菜食がなかなか出来ないのは、人の身体が食べなくては生きられないし食べると美味しいという点や、歴史的・社会的な生活環境のせいもあるが、「懈怠」(なまける)という煩惱が強いからでもある。

なぜ懈怠になるのか。それは「識(凡心)は常に楽を求む」(教行信証)で、善に励むより、楽な方に、楽な方に傾く煩惱が凡夫の私には強いからである。

り。

と感想を述べておられます。

疑いがいつまでもあるから信心がいたただけないのです。なんとか疑いを晴らしたいと聴聞を重ねるのですが、いかにしても疑いが晴れない。いつまでもモヤモヤしてハッキリしないのに困り果てるのです。

疑いがあるから信が得られない、信が得られないから助からぬ。この壁にぶつかってしまふ。このところで行ったり来たりせざるを得ないので。

そこでよく本願のお心を聞くと、「私はもう疑いだらけであった」と身に沁みる。

疑いだらけの私だから、もうどうなるでもこうなるでもない、いよいよ助からぬ身であると知らされる。疑いだらけの助からぬ身、それが私の本性なのです。この本性にぶつかったとき、この私目当てに

「ただ称えるばかりで引き受ける、その外に何もいらない」

「その疑いだらけのお前だから、汝の助かる仕事はこの阿弥陀に任せてくれよ」という大悲を仰がずにはおれないのです。

我がムネのウタガイに、「ど

うか、このムネから去ってほ

しい。お前が居るから真実信心が得られぬ」

と言うたら、ウタガイの曰く、

「このアナタのムネから、私は、ここをのいてくれ、去ってくれとは、ムリなことを言うものである。アナタのムネからどこにも行きようがない」

そこで、

「ウタガイよ。どうでも、オレのムネから、去らないというのなら、かまわないから、オレのムネに頑張っておるが

いい。オレはお前なんか相手にしないので、お前が居てもよいから、よき人の仰せのまま

如来のお勅命、をそのままいただく、と私が、わがムネのウタガイは相手にならず、そのまま、よき人の仰せ、如来の勅命を信じたなら、ウタガイのすがたは見えなくなつて、ウタガイのかわりにお念佛が出たとのこと」

『木村無相 お念仏の便り』よ

妙好人として有名な田原の

お園さんの歌に、

疑いよ

ここ聞きわけて

去んでも

そちが居るゆえ

信が得られぬ

疑いに

ここをのけとは

無理なこと

ムネ(胸)をはなれて

ドコに行きましょう

疑いよ

是非ゆかぬなら

そこに居よ

ソチにかまわず

信をとるべし

疑いは

どこに居るか

問うたれば

かわりに出てくる

念佛の聲

これは、まことにありがた

しいのですね」

A「ええそうです。それで私たちの小さなのちにも

浄らかな慈悲の心が一瞬でも起りますが、その慈悲

は量りないのちから起こつて来るといことが知られます。そうすると量りな

いいのちの阿米ダ仏には、はかりない慈悲の心がはたらいていることが知られま

す」

B「阿米ダ仏は大慈大悲のお心であり、私たちを憐れみ、助けようとはたらきづ

めにはたらいてくださつて

いるのですね」

A「ええ、そしてそのはたらきが南無阿弥陀仏という言葉となつて私たちに喚び

かけてくださつているので

す。阿米ダ仏は私を抱いていてくださつていて、

私を受け入れ、阿米ダ仏の領域に迎え取ろうと、南無

阿弥陀仏という言葉となつて喚びかけてくださつて

るのです」

B「お念仏は阿米ダ仏の喚び声なのですね」

(了)

(了)